漁業村落研究の一視角

——伊豆半島定置漁村における「縁組関係」を通して——

勝 又 猛

わが国の村落社会において普遍的にみられる地縁結合（村組、講）とともに、基本的な「家」連合体としての社会集団は「同族関係」と「縁類集団」である。各家はこうした二種の家連合の結節点におかれているか、或は、いずれか一方に所属している場合が一般的である。それゆえ、日本村落の研究においては社会の内部構造を構成する、かかる基本的な社会関係を検討しなければならない。しかして、前者は、超世代的な家の系譜関係に結合原理があるのに対し、後者に婚姻当事者を媒体とした間接的家連合であって、パーソナルな夫婦関係がその中核であるといわれてきた。したがって「同族団」の上下の・本末的關係に對し對等的關係であると考えられている。

そこで、従来、村落社会の構造分析の構想においては存在形態の類型化の傾向を進め、この面で特に顕著な業績が示されているが、同族組織間の関連的構造・同族団と縁類の相互関連性・両者の機能の差異などにおいては今後に残された問題が多いといえる。したがってこれまで、同族理論の研究の展開過程に取上げられてきた実証的研究の多くは、同族組織が本来的には封建社会体制下の封鎖的社会にその発展の基礎をもつべきものであるところから、その構成が明確な形において現存し、機能も強固である村落が対象となってきた傾向が認められるのである。これは反面、同族組織に明確を欠き、その機能においても弱体化しているような村落に対しては今後の課題となつてゐることを意味しているのである。しかし、今後の研究に際し、こうした原形的実態の理解の上に立脚しなければならな

いが、現実に変動している村落社会の実態としての姿を解明していく場合には、なお、多くの追究すべき分野があるのではなからうか。

そこで、本稿においては同族組織の結合関係が弱体化し、その機能も弛緩しつつあると見られる漁業村落の実態を具体的に把握するためにはいかなる接近の方法が有効且適切であるかが問題となった。そのため前述の如き村落社会の基本的な社会集団である親族組織（＝縁類）を研究対象とし、縁組関係を通じて村落構造の実態を考察しようとした。さらに、これまで縁組関係の研究主題は通婚圏の諸形態とその地域の封鎖性や変動過程の考察にあったが、本稿は特に縁組関係の範囲・集中度・結合の様態などを客観的指標として、その背後にある社会関係の変態を追求しようと考え、その方法論についての提言を試みようとしたものである。しかし、縁組によって結ばれる社会関係の生起現象も、その関係当事者及び家族の同類意識や個人婚姻・縁組当事者を媒体とする「家」相互の感情の融合に支えられているのである。そして、その関係は親族としての個人的な関心をケルンとする相互認知によって拡大され、その居住地域（＝生活圏）の伝統的な文化様式や觀念形態により、また、特定個人の意識や行為によって変容するものである。こうした指標を分析

の手段として、變動する村落構造の実態を理解するためには、なお、充分な科学的検討を必要とすることはいうまでもないが、ただ本稿では村落構造分析の研究、方法について、上述するところを具体的な資料に基づいて提示してみたいと考える。

二

ここで取上げた資料は静岡県賀茂郡城東村奈良本小字北川の壬申戸籍より昭和三十一年までの戸籍である。

北川部落は伊豆半島東海岸に在り、天城山系が海岸に突出した斜面に階段状に集落が形成されて平地は全くなく斜面に僅かな田と密柑の栽培を行っている程度である。住民の多くは、この地方で好漁場の一つに数えられる北川漁場での定置網（根拵網と呼ぶ）に従事しており、現在太平洋漁業定置部との共同経営という名目で操業されているが、実質的には純然たる漁業賃金労働者である。

次に、資料について、前もって限定すると、(一) 世帯及戸数、現在（昭和三十一年八月）当部落の世帯数は八九世帯である。このうちに定置網従業漁夫として最近移住した二五世帯と昭和二〇年以降の移住世帯の五世帯が含まれている。資料の対象としては明後五年戸籍編成当時の在籍現住の戸数とそれ以後

の分家と昭和二〇年までに転籍し現住しているものを合せた五九戸を分析した。したがって、村外分家の在籍者の家と最近の移住者の家は当然除外されているわけである。

(二) 地域、地域的限界は、明治二二年以前の旧奈良本村字北川として一部落であった地域を対象としている。現在は大宇奈良本の部落内小部落と見做されているが、旧来の一部落に限定する。

(三) 資料の編成方法、家毎に壬申戸籍以後の一切の戸籍（除籍簿）を再編成した系譜を作り、それと現住家族調査表とを照合し、古老に面接して修正補足して家別戸籍簿を作製した。

(四) 世代区分、時間的経過を先々代、先代、現代と区分したのであるが、この三世代区分には規定の不明確さについてのそしりはまぬがれない。相統年月日によると隠居慣行のある当部落では実態とのズレも見られたので、相統年月日を考慮に入れたついでに、五年とみて（経過年数のほぼ三分分）原則として夫婦と婚姻可能年令の子を含めたものを一世代と考え、さらに標準的な家で三世代を経過しているところから三世代に大別した。その結果、縁組の出入り世代間のズレが生じたものは五十三縁組中六ケースある。

(五) 縁組、ここでは縁組とは嫁入婚、嫁入婚の婚姻と養子縁組との両者を合せた意味で

使用している。さらにパーソナルな関係と共に「家」関係にも使用する。

以上を前提として調査方法とその結果を概略述べることにする。

三

部落内における縁組関係を考察するにあたって、先づ、当該部落の縁組地域がどのようなになっているか、その変動、さらに、部落内外における縁組の対照関係をみると、その結果は第一表の如くである。この表で著しい点は、部落内への婚出が現代に近づくにしたがって減少していること。それと逆現象の傾向は県外への出婚が世代毎に増大してくること。村内他部落への出婚は大体同様の傾向で二〇%前後を示している。さらに、婚入については、部落内からの婚入が世代毎に増加し、現代で四四%になっている。それと逆現象のみられるのは村内他部落からの入婚で、奈良本部落の四一%を最高として合計して六五%の高率を示していたものが先代四〇%、現代二〇%と減少している。そして、先代より県外からの婚入がみられ漸増の傾向にある。ここで、本部落と地理的に最も近接しているのは大川部落で、次に奈良本部落であって、両者に狭まっている。奈良本部落は本村中央の部落で農業経営もかなり行われておる。それ

		婚 入				婚 出				総 計
		先々代	先代	現世代	計	先々代	先代	現世代	計	
実数	部落内(北川)	9(2)	18(4)	27(4)	54(10)	9(2)	17(4)	27(5)	53(11)	107(21)
	奈良本	19	10(2)	8(2)	37(4)	1	4	4	9	46(4)
	村大川	6	6	4	16		2	7	9	25
	内地片瀬	2	1		3	1	1	1	3	6
	地白田	1	5	4	10		6	6(1)	12(1)	22(1)
	部落熱川	2			2		1		1	3
	小 計	30(2)	22(2)	16(2)	68(4)	2	14	18(1)	34(1)	102(5)
	隣接町村	6(2)	10(2)	8(1)	24(5)	1(1)	5(1)	10	16(2)	40(7)
	賀茂郡内			2(1)	2(1)			4	4	6(1)
	静岡県内		1	2	3		5	11	16	19
数	同 外		1	6	7	1	12	24(1)	37(1)	44(1)
	不 明	1(1)	3(3)		4(4)					4(4)
	計	46(5)	55(11)	61(8)	162(24)	13(4)	53(5)	94(7)	160(15)	322(29)
百分	部 落 内	19.6	32.7	44.2	33.3	69.2	32.1	28.7	33.2	33.2
	奈良本	41.4	18.2	13.1	22.9	7.7	7.5	4.3	5.6	14.3
	村大川	13.0	10.9	6.6	9.9		3.8	7.4	5.6	7.8
	内地片瀬	4.3	1.8		1.9	7.7	1.9	1.1	1.9	1.9
	地白田	2.2	9.1	6.6	6.2		11.3	6.4	7.5	6.8
	部落熱川	4.3			1.2		1.9		0.6	0.9
	小 計	65.2	40.0	26.3	42.0	15.4	26.4	19.2	21.2	31.7
	隣接町村	13.0	18.2	13.1	14.8	7.7	9.4	10.6	10.0	12.4
	賀茂郡内			3.3	1.2			4.3	2.5	1.9
	静岡県内		1.8	3.3	1.9		9.4	11.7	10.0	5.9
比	同 外		1.8	9.8	4.3	7.7	22.7	25.5	23.1	13.7
	不 明	2.2	5.5		2.5					1.2
	計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

()……嫁入婚を示す

ゆえ、旧村以来の村づきあいも頻繁に行われており、村内他部落に比して縁組率が高いが、それには地理的距離が近いという因子が当然考えられる。第一表での問題は、部落内婚率が現世代へと近づくに従って漸増してきているが、これは部落内での縁組契機と部落居住者のうち婚姻可能年令に達した員数・養子縁組件数との差によって、大きく影響されるのであるから、封鎖性の問題も内婚率の指標のみでは論定しがたい。

とまれ、世代の近づくに従って通婚圏は拡大し、婚出において県外出婚率が高まってきたにもかか

第二表 世代別部落内縁組の状態

調査家 No.	先々代	先 代	現 世 代	計	備 考
2		38	⑨, 52	3	
3	⑪	⑬, 31	⑩, 10	4	
4		⑬	⑤	2	
5		⑫	⑥	2	
6			11	1	
9		11, 55, 50	⑬, 2	5	
10			③, 47	2	
11	3	⑨, 14	⑥	4	
12		④	36	2	
13	19	⑬		2	
14		⑪		1	分家二代
16			13, 3	2	
19		⑬		1	
20			37	1	分家二代
21		⑪		1	
22			⑩	1	
23			25	1	分家一代
24	37, 39			2	
25		5	23	2	
26		④		1	
27			47, 38	2	
29		33, 36		2	
30	④, 38	22	④, 57	5	
31			③, 54, 21	3	
33	⑫	④, 4		3	
34		33	③	2	
35			⑥	1	
36	⑥, ⑤	⑫, 47	⑫, 9	6	
37	②		⑫, 49	3	
38	③	②	⑫	3	
39	②		34	2	
40		12		1	
42			46	1	
44		26, 50		2	
45			30	1	分家二代
46	30		⑫, ⑩	2	
47		⑥	⑫, ⑩	3	
49	⑥	52	⑫, ④	3	分家三代
50	49	⑨		3	
51	36		58, 4	3	
52		④	56, ②	3	
54			③, 5	2	
55			⑥, ⑨	2	転籍二代
56		36	⑫, 55, 35	4	
57			③	1	転籍一代
58			⑤	1	転籍

* 欠番は部落内縁組の全然行われなかつた「家」

** ○印は入縁組

*** 数字は出入縁組先の「家」の調査番号

**** 不明2を除く

わらず、なお、約三分の一の縁組が部落内においてなされている事実が窺われる。さらに、問題の焦点を部落内にしぼって各戸の縁組状況を考察すると、第二表に示すような結果となる。

対象となった家を、さらに分析すると、明治五年以前からの在籍現住者の四六戸、明治五年以降の二代目分家・転籍戸数八戸、一代目分家・転籍戸数五戸となっている。

次にこの五九戸の三世代にわたる部落内縁組の回数を第二表に基づいて、各戸別に累計したものが第三表に示す通りである。これによると全戸数のうち約八〇%の家は部落内ではいづれかの家と以前において親類の関係を結んでいるものとなっている。その中でも最も多い家は六回の縁組がなされ、一、二回の縁組をしている家は部落の過半数を占めている。

さらに第三表の内容を表示すると第四表の如くなる。

まず、部落内で全く縁組のなされていない十三戸（二二%）から簡単に考察していくことにする。これらのうち明治五年以前からの在籍現住戸数七戸（内分家二戸）、分家二代目四戸、分家一代目二戸で、分家の戸数は八戸である。この八戸の現世代の配偶者の出身地

研究ノート

次いで部落内に於ける縁組の家についての分析であるが、ここでは特に家の結合関係についてみることにする。前述のごとく、部落内での縁組「家」は約八〇％に達しているのであって、単に機械的な手順のみにより家結合の連鎖関係をみる場

は村内他部落二、郡内他町村三、県内他郡市二、県外三となっており特定地域からの集中は見られない。しかし、他の旧家五戸は村内他部落のうち例外なく奈良本部落、大川部落、白田部落に集中している。かかる点より、階層的通婚、婚姻に対する新旧両家の觀念の相異、分家の性格などの諸問題が提起される。だが、この場合特に当該村落が海上を生業の基盤とする定置網漁が主生業であることにも充分な注意が払われなければならない。

第三表 部落内縁組の戸別累計

縁組戸数 縁組回数	戸 数	%
0	13	22.0
1	14	23.9
2	16	27.1
3	10	17.0
4	3	5.1
5	2	3.4
6	1	1.7
計	59	100.0

第四表 第三表 内 容 分 析

		家の新旧世代基準	世 代 数	戸 数	現世配偶者 世代出身地	縁組回数	戸 数
		明治五年以前から 旧家三代目分家 (A)	三	三九 (内分家一)	部落内	6 5 4 3 2 1	1 2 3 10 15 8
部落内に縁組の「家」の有無	有	明治五年以降の 分家 (B)	二 一	三 一	同 上 同 上	1 1	4 1
		昭和二十年までの 転籍家 (C)	二 一	一 二	同 上 同 上	2 1	1 2
	無	(A) 旧家 (A) 分家	三 三	五 二	村内他部落 不 定 *	* 不定とは特定地域への集中性は認められない事例	
		(B)	二 一	四 二	不 定 不 定		

合は、特定の家々による家群の分立は認められなかった。しかし、問題点を現世代のみに限定すると、この家の結合関係は第一図に示す如くに分離する。これは単なる便法としての分類であって、それが直ちに社会学的に特別な意味をもつものであるとは考えられないが、こうした客観的な社会関係の形態を手掛りとして、「家」連合の共同関係を検証することは原則的には認められるのではないかと考えられる。なんとすれば、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴは特定の家々の間における直接的関係であるため村落生活のうえでは、一般的に親族、姻族関係の意識は互に強固であると考えられうる。Ⅰ、Ⅱにおいても、縁組両家の直接的関係の他姉妹の婚家も互に、所謂親類という関心は相互に認知しているものであると考えられる。次に

第一図 縁組による「家」の結合関係

※ 数字は家の調査番号
 ※※ 矢印は出婚・出縁組を示す
 ※※※ 点線は兄弟・姉妹関係を示す

転籍三戸は例外なく比較的古家に属する部落内居住者との間に婚姻関係をもっている。これは結婚が前提となり転籍定住したものもあるが、いづれにしろ、居住地における旧家との紐帯をより強固にすることによって村落の生活組織の中に安定した地位と役割を占めることになるためである。

家と部落内婚分家、I からIVまでの家結合の村落生活での諸様態、結合形態の変動、習俗の合力組織の比較などが居住者の主観的側面にまで分析を試みると、具体的な村落構造の実態把握の上に、有力な手掛となると考えられる。

四

北川部落を縁組関係というプリズムに当て

た場合、先づ問題となったのは部落内において縁組関係をもつ家とまたない家対比によって派生する問題点である。この二つに分類される家群を詳細に検討することにより種々の客観的社会関係が窺知される。ここでは、これら社会関係のうちの一つである「分家」(村内分家)のみについて考察を進めてみたい。

「分家」は新しい「家」の創設行為であって、その分家条件は、この場合家の結合契機として重要な意味をもってくる。それゆえ、本部落のごとく二代目分家、一代目分家合せて十戸(七戸・三戸)のうち部落外婚六戸、部落内婚四戸となっているのは、注目しなければならない。なんとすれば、かかる現象の意味するものが分家条件を検討することにより明らかとなるうが、漁業村落では、本家の同族統制の基盤として、土地所有が問題点となる農村の特に村内親がかり分家に比して、本分家間の庇護・統制と奉仕・被支配の関係に異なった現象を派生するからである。この農・漁両者の間には基本的な問題として、土地と海、その私有と共有、主として個人経営と協業経営などの相異が考えられ、それは家族制度、家産相続などに対する意見・感情・行為などの規定的要素となり、さらに「分家」にも影響も及ぼすと考えられる。そして、また、姻族の「家」の部落内における

有無が分家の村落生活において如何なる意味をもち、具体的にどのような様態をとるか等の諸点が問題点となつてくる。

第二の問題は農村の土地所有に對比して漁村の漁場支配とそれに随伴する漁撈形態との関係である。本部落のごとき定置漁村で、しかも大企業資本により経営され、漁村居住者が労働者となつている場合は特異な例である。だが、漁業村落の研究においては、漁場の入漁権利、特定漁種の占有形態、船主・乗子、網主・網子などの雇傭関係など、生産機構、労働組織、労働市場などの諸問題と「家連合体」との相即関係は特に留意しなければならない。

以上のようなアプローチの方法が漁業村落研究に有効であつたかどうかを現在においては証左するまでに、調査の結果の整理も到つていない。しかし研究意図についてふれた如く、村落の動態的把握を試みる時、客観的指標を分析の手段として、その背後にある変動を居住者の主観的側面との對比の上に論定することは、特に重要である、そして、それは今後の研究課題として大きな分野であると考えられる。小稿を提示してあえて問題提起を試みた所以もそこにある。

(本稿の資料は「伊豆半島漁村の村落構造と漁業組織」研究のため数回の調査

を行った際の一部である。この調査に同行協力して頂いた本学大学院榊田久雄氏とともに研究室の諸氏から多くの御教示をうけ深甚な

謝意を表したい)

——筆者 東北大学大学院学生——

★家族制度の研究★

日本法社会学会編

(上) 歴史編 (A 5 270頁 400円)

律令時代の相統制……………	龜田隆之
中世の相統制……………	新田英治
江戸時代の農民の「家」……………	北島正元
江戸時代における農民の家とその相統形態について……………	大石慎三郎
明治前半期における「家」制度の形式……………	福島正夫
家と共同体的秩序……………	石田雄一
家長選挙制論……………	磯野誠一

(下) 理論と実態編 (A 5 300頁 580円)

「家族主義」への批判的一考察……………	田中吉備彦
同族・親族及び家族の関係……………	玉城肇
末子相続について……………	中川善之助
戦後の民法改正過程における「氏」……………	唄孝一
旧中国社会の「仲間」主義と家族……………	仁井田隆
中国婚姻法きさがき……………	潮見俊子
	鍛冶千鶴
	黒木三信
	西村郎雄
	江守五夫

《前婚姻的自由交渉》慣行について……………

—— 有斐閣 ——

On A Point of View in The Study of Village
—with the Case Study on the “Matrimonial Relationship
in a Fishing Village in Izu Peninsula.

Takeshi Katsumata

Tohoku University

Social groups as basic family aggregation which are universally seen in Japanese village communities are the “*dōzoku-dan*” (the extended family system) and the “*shinzoku-shūdan*” (family association of the same kin of wife’s side). Generally each families is placed on a knot of the network formed of these two kinds of family aggregation, or it belongs to the one of the two. In the study of the Japanese villages, therefore, it is inevitable to examine these basic social relationship which constitute of the inner structure of a village community. It is though that in the plot of analysis of village community heretofore much attention has been paid to make types of the form of being of the village community, and actually the remarkable achievements has been done in this direction. However, still remain the questions on the relative structure between the organizations of the extended families, on the relation of the *dōzoku-dan* with the *shinzoku-shūdan*, and on the difference of their functions.

For the purpose of gripping the actual condition of fishing villages where the connection of the organizations of the extended families are becoming loose and their functions being enervated, I accordingly attempted the consideration from this point of view with the *shinzoku-shūdan* as the object of the study, focusing on its “matrimonial relationship.”

Date and Process of the Study.

- 1) Field: Hokkawa, Kito village, Kamo province Shizuoka Prefecture.
- 2) Date: Family register and residence survey book of the village; 1876-1957 (Meiji 5-Showa 32).
- 3) Process: a) Marital area.
b) Rate of Marital interrelations in Hokkawa.
c) *shinzoku-shūdan*.

The forms of connection of families.

Approaching the subject from the point of view mentioned above, the social relationship of the fishing village has been able to objectively be established. However, the elucidation, of the actual condition, I think, would become complete only when the analysis of the psychological aspects of the people in the many social relationship is performed as the means of analysis. At the same time, the control of the fishing ground in fishing villages, compared with the land-ownership in agricultural villages, and the form of fishing attendant upon it must be called to account; that is, the questions on the productive mechanism, on labour system, and on market of labor in the village concerned. The answer for the problems for further study will be provided for with comparative study of such points as stated above.